

不確実でたえず変わりつつある状況に対して、あるアーティストたちは、見る者の中に不断の変化を喚起するしかけをつくる。それは作家自身の変化の反映であり、観客の身体に共振や不協和音を生じさせることで彼らの変化を「自覚」させる。

及川と山川の二人の作家に共通するのは、自己の身体の一部である声によって空間の中に自分の身体を拡張させようとする強い意識である。二人は異なった形で自分の「声」を再発見し、これを変容し、「うた」として空間を満たす。彼らの「うた」はただ空間を振動させるだけでなく、情報化され分節化された世界の裏側にある無意識ともよばれる「分節されえない」世界を構造として浮かびあがらせ、あるいは、その生の深みにおいて召還しようとする。発生の過程で視覚より先に発達する聴覚は、より原始的な意識の奥まで振動を伝達する。そして、声は指紋と同様自己同一性のシンボルでもある。

及川は、自らの声を電子音をとおして変換する。彼のリップノイズは、獣のうなり声や女性(他者の声)、風のざわめきなどに変容する。音はいったん空間に物質のように配置され、複数の音源(スピーカー)によって形成された音場を、しなやかに、暴力的に移動し、バーチャルな風景や気象を出現させる。暗い空間の中、観客は音の発生により空間に亀裂が入り、空気が彫刻されていくような感覚とともに、遠くに身体が連れ去られるような感覚に陥る。目に見えない膨大な音の情報は何度も繰り返し聞くことで些細な音の変化を感じ取りイメージにし、それを時間軸に配置する制作過程は、刻一刻と過ぎ去っていく瞬間の意識の構造化であると及川はいう。

本パフォーマンスでは、会場内に分散配置された9.1chのマルチチャンネルにより電子音響空間ライブを行なう。ダイナミック、静的どまりませた数曲を演奏する音響組曲となる。

山川冬樹は、身体内部でおこっている心臓の鼓動や脈動、呼吸などの生命活動をテクノロジーを使って拡張、表出する。現代社会の抑圧の中で、自分の声を発したいと感じたとき、彼がたどりついた「うた」はホーメイだった。それはトゥバ共和国に伝わる喉歌で、もともと声に含まれている倍音の高音部を声帯の力で意識的に強調させて口笛に似た音をだし、舌や口腔を微妙に震わせて低く美しい倍音をだすもので、叙事詩の装飾として生まれたものだった。この震動は呼吸、鼓動、脈動といった生命現象と連動し、これらが重層し、増幅して表出され、空間を生を震動でゆるがし、見る者の生への意識を覚醒させるのが山川の作品体験である。山川は自分の生命活動への自己言及

をとおして、その場にいる者すべての生命活動への内省をうながす。音による、声による自己過及と拡張。

今回のパフォーマンスは、トランスフォーメーション展への山川の解釈から構想された。座席の下に設置されたスピーカーから振動音が響き、心臓の音がきこえている。自動装置につけられた髪の毛が回転しながら激しくシンバルを叩く。山川の脈動は観客のパルスとシンクロし、ざわめきたつ磁場が生まれる。彼の「うた」は失われた世界から、言葉を忘れた神の声のように響きわたり、変容の叙事詩を飾る。

長谷川祐子(東京都現代美術館チーフキュレーター)

■ 山川冬樹 | Fuyuki Yamakawa

ホーメイ歌手、あるいは『全身美術家/全身音楽家』。ホーメイをはじめとする身体の内部で起きている微細な活動や物理的現象をテクノロジーにより拡張するパフォーマンスで知られる。国際展への出品も多数あり、国内外で活躍。MOTコレクションにて、収蔵作品《The Voice-over》出品中。本展のための一夜限りのパフォーマンス。身体の接写的な見え方、聞こえ方によって、日常的な身体像とは別の身体像を表現する。

■ 及川潤耶 | Junya Oikawa

音楽家/音響空間作家。自身のリップノイズや囁き声などをもとに電子音楽を作曲。対象音の構成要素を綿密に分析し、その内部にある微細な音響を有機的に拡張/伸縮させる手法をとる。トランスフォーメーション展では、本展のための新作サウンドインスタレーションを出品中。マルチチャンネルによる電子音響空間ライブ。多様なサウンド・テクスチャの組曲によって、変化する幻風景のメッセージを空間にインストールする。